

日本保健医療社会学会ニューズレター (No.106) 2017/8/30

目次

1. 会長挨拶
2. 第44回大会について
3. 30周年記念事業関連報告
4. 第2回理事会報告
5. 定例研究会の案内・報告 (関東)
6. 定例研究会の案内・報告 (関西)
7. 看護・ケア研究部会報告
8. 若手研究者支援企画の報告
9. 追悼 日野原重明名誉会員
10. 編集後記

1. 会長挨拶

本年5月から会長をしています神戸市看護大学の樫田です。本学会には、一般会員としても20年以上お世話になっていますが、役職者としても、ずいぶんと経験を積ませて頂いていきます。昨年度までは6年間連続で編集委員会委員をやっていました。また、その前には、研究活動委員会委員(理事兼任)を2回(合計4年間)やっていたことがあります。その他に、「会費値上げ担当理事」という結構気の重い仕事をしたこともあります。上記のように、期間的には、かなり長い役職歴があるのですが、分野的には偏っている、という自覚があり、会長になるにあたっては、その点に若干の不安があったのですが、幸いなことに、今期理事会では、(樫田が担当したことがない)広報にも総務にも渉外にも、それらの諸業務に関しては、明らかに優秀で、業務遂行能力に長けた方に担当理事職について頂いたので、理事会全体としては、万全の体制となったのではないかと自負しております。どうぞ2年間よろしく願いいたします。

本ニューズレター(106号)は、今期理事会になって最初の単独理事会を7月23日に開催した直後に発行する号ですので、以下短く、樫田の今後の抱負について書き記し、会員諸氏のご叱正を仰ぎたく思っております。

まず最初の抱負は、本ニューズレターの目次の3番を見てもわかるように、2019年に迎える学会創設30周年に関してのものです。今期の最大の課題は、この学会創設30周年事業をいかに前向きなものとして成功させるのかということではないか、と思っております。具体的には、以下のように考えています。すなわち、学会や研究を巡る社会状況の変化には近年大きなものがあると理解していますが、この変化は、学会にとってリスクであるだけでなく、チャンスの面をも持っていると考えられます。つまり、この変革期に、本学会の特質を踏まえつつ、積極的に対応していくことができるのなら、諸学会の中に占める本学会のプレステージをかなり高めることができるのではないかと、思っております。そういう、積極的に打って出るきっかけに、この30周年に関する記念事業をしていくことができればよいだろう、と思っております。そのために、まず、第一歩として、会員全員宛に「学会に要望することは何ですか」アンケートをとります(理事会承認済み)。また、有志評議員(+α)との、複数回の座談会も企画・準備しております。そういう感じで、しばらくは、いろんな企画で会員の皆様にお声がけすることも多々あるかと存じますが、どうぞよろしくご支援のほど、お願い

いたします。

ついで、2つ目の抱負は、会員ニーズの多様化に対応していくことに関してです。学会が、基本的研究能力をもった同質性の高いメンバーだけで構成され、したがって、学会の主要機能として要請されるものが、相互研鑽と相互扶助である、という、そんな牧歌的な時代は終わったと思っております。とりわけ、本学会のように学際性と現場性を基本要素とするような学会では、会員の多様性を前提とした、積極的な研究発表支援（論文投稿支援を含む）と異分野にまたがる研究交流促進を、学会の重点プログラムとして組んでいくべきだと思っております。さらには、学会は、そのような支援や促進を単に実施するだけでなく、その方法を開発する部分から、関与するべきだとも思っております。この部分に関しても、30周年関連事業同様、つねに、会員の皆様からのアイデアと提案をお待ちしておりますので、どうぞよろしくご協力のほど、お願い申し上げます。

さいごに、3つ目は、上記の2つの目標を達成するために、執行部機能を強化することも必要なことだろう、と考えておりますので、そのことに関連した抱負です。この点については、すでに、前期理事会からの引き継ぎもあり、少しずつ動いております。じつは、研究活動委員会自身は、2016年度から立ち上がってはいたのですが、今期に入って初めて、次年度および次々年度大会の大会長（2名）と大会事務局長（2名）が、研活委員会内に入って諸調整を行う、という体制が確立いたしました（この体制がとれたおかげで、30周年記念大会企画を2分割し、2018年度の星槎道都大学大会内において、「30周年記念事業プレ企画」として、いくつかの企画を実施することが可能になりつつあります）。また、前期理事会では、総務理事が兼ねていた「広報活動部分」を、今期は、専任の担当理事を立てて独立させました（この方針に連動して、いまだ具体策は未定ですが、ニューズレターの内容を充実させていくことが可能かどうか、検討中です）。具体的な改革内容は、本ニューズレターの「理事会報告」をご覧ください。そして、どのようなことであっても、ご意見を頂ければうれしく存じます。

以上、簡単に、今期の抱負を述べさせて頂きました。2年間でできることが限られていることは承知しておりますが、できることならば、これまでの理事会が達成なさってきた、学会活動の拡大基調を維持しつつ、次の30年間のさらなる飛躍に向けての基盤づくりをも同時にしていくことができれば、よいな、と思っております。会員諸氏のご理解とご協力を切に願う次第です。

（樫田会長）

2. 第44回大会について

前号でお伝えした通り、第44回日本保健医療社会学会大会は、2017年5月19日（土）・5月20日（日）に、北海道北広島市の星槎道都大学にて開催されます。大会テーマは「ヘルス・ガバナンスの可能性」です。大会長講演、特別講演、大会企画シンポジウム等の詳細を現在実行委員会と研究活動委員会で検討しています。

（田代理事：研究活動担当）

3. 30周年記念事業関連報告

再来年2019年に学会発足30周年を迎えるにあたりまして、今後、当学会に対するご意見やご要望を学会員の皆様からおうかがいしながら、各種の記念事業の企画・運営に取り組んでまいります。具体的には、学会員を対象とするインターネットによるアンケート調査、および、評議員の方々に参加協力を募っての座談会を予定しております。

アンケートにつきましては、すでに学会員向けのメーリングリストでお知らせいたしましたとおり、以下のURLから回答・提出ができます。

<http://www.ehealth.niph.go.jp/aks/index.php?uri=User/dispatch&timer=1502160863522386148>

回答の締め切りは、2017年9月15日(金)23時となっております。ご協力お願い申し上げます。

(松繁理事：総務担当)

4. 第2回理事会報告

日時： 2017年7月23日(日) 13:00~16:00

会場： (株)国際文献社 アカデミーセンター 4階会議室

出席者： 榎田会長、松繁理事、朝倉理事、田代理事、西村理事

事務局： 平野(記 国際文献社)

欠席者： 石川理事、伊藤理事、小澤理事、林理事、三井理事

1) 今後の学会活動の進め方について(榎田・松繁)

榎田会長より、理事会におけるメーリングリスト上の審議の進め方について提案があり、審議プロセスの迅速化へ向けた検討をおこなった。また、現行の理事の選挙・選出方法について、他学会の動向も検討しながら振り返り、当面は現状維持することとした。学会ホームページに掲載されていないニューズレターの欠号分については、今後会員に呼びかけながら確保・整理に努めていくこととなった。

2) 第43回大会報告・会計報告(田代)

田代理事より第43回大会の会計報告があった。今後の大会運営のさらなる充実へ向けて、運営体制について協議した。

3) 第44回大会及び第45回大会の準備状況の報告(田代・小澤・伊藤・林)

田代理事より第44回大会の準備状況が報告された。また、7月30日の研究活動委員会で、大会校と研究活動委員会の役割分担等が確認された。

4) ニューズレター105号の発行報告・106号の予定(西村)

西村理事よりニューズレター105号および106号の発行スケジュールが報告された。

5) 編集委員会報告(朝倉・三井)

朝倉理事より論集29巻1号の特集案について報告があった。また、現行の査読プロセスのあり方について今後の編集委員会において検討していくことが伝えられた。

6) 定例研究会の報告(関東)(田代・小澤)

田代理事より秋に看護・ケア研究部会と合同での企画を予定している旨の報告があった。

7) 定例研究会の報告(関西)(伊藤・林)

特になし。

8) 看護・ケア研究部会報告 (朝倉)

特になし。

9) 渉外・国際交流活動報告 (石川)

石川理事が欠席の為、松繁理事より代理で添付資料次第の通り ISA トロント大会について演題募集中であるとの報告があった。

10) 入退会者の承認について (松繁)

松繁理事より新入会者 2 名 (通常会員) の承認依頼があり、承認された。また、退会者 1 名 (通常会員) の報告があった。

11) その他 (含: HP の更新、大会実行委員会委員への委嘱状の発送等について)

西村理事より学会ホームページに掲載されている各委員会のメンバーの所属先を確認するよう依頼があり、適宜更新していくこととした。

松繁理事より 30 周年記念事業に向けてのアンケート調査及び座談会を開催することが提案され、承認された。

以上

5. 定例研究会の案内・報告 (関東)

2017 年度第 1 回の定例研究会 (関東) を看護・ケア研究部会との共同開催で行います。本年『葬儀業のエスノグラフィ』 (東京大学出版会) を公刊された文化人類学者の田中大介さんをゲストに迎えて行いますので、ぜひ奮ってご参加ください。

日 時: 2017 年 11 月 11 日 (土) 14:00-17:00 (予定)

場 所: 首都大学東京 秋葉原サテライトキャンパス (予定)

報告者: 田中大介さん (東京大学)

指定発言者: 鷹田佳典さん (早稲田大学)

タイトル: 葬儀業におけるデス・ケアの実践と特質

(田代理事、小澤理事: 研究活動担当)

6. 定例研究会の案内・報告 (関西)

第一回関西例会を下記のとおり開催いたします。奮ってご参集ください。

日 時: 10月14日 (土) 13:30~16:00 予定

場 所: 大阪市立大学梅田サテライト (大阪駅前第2ビル6階)

<http://www.gscs.osaka-cu.ac.jp/access/>

講演者: 中山和弘さん (聖路加国際大学)

テーマ: 「ヘルスリテラシーと情報に基づく意思決定」

第二回の例会は来年の 2 月 3 日 (土) 14 時~16 時、山中浩司さん (大阪大学) にご報告いただく予定です。

(田代理事、林理事、伊藤理事: 研究活動)

7. 看護・ケア研究部会報告

1) 第1回定例会の開催について

下記のように第1回定例会を開催しました。発表内容の概要は後日、学会ホームページに掲載します。

発表者1：荻野貴美子さん（星槎大学）

発表テーマ：「医療と教育の協働—公立中学校における看護師から
教員への医療的情報の提供と活用に関する事例研究—」

発表者2：吉田澄恵さん（千葉大学）

発表テーマ：「大学改革期における看護学分野の教育・研究の現状に関する一考察」

2) 第2回定例会の開催について

下記のように第2回定例会を開催しますので、ご案内します。部会会員以外の方でもご参加いただけます。

日 時：9月23日（土・祝）13:30～17:00 予定

場 所：首都大学東京荒川キャンパス 校舎棟 364 教室

発表者1：植田仁美さん（リンパ浮腫ケアセンターBell's House）

「上肢遠位に遠心力がかかる運動（バドミントン）をしても上肢浮腫に改善がみられた事例報告」

発表者2：本多康生さん（福岡大学）

「病による排除—ハンセン病療養所におけるフィールドワーク」（仮）

※開催場所の地図は以下をご覧ください。

<http://www.hs.tmu.ac.jp/access.html>

問い合わせ先 e-mail（事務局白瀬宛）：y.shirase (a) r.hit-u.ac.jp ※(a)は@に換えて下さい。

（朝倉理事：看護・ケア研究部会担当）

8. 若手研究者支援企画の報告

第43回日本保健医療社会学会大会連動 若手研究者支援企画（『保健医療社会学論集』編集委員会主催企画第4弾）を、2017年3月25日（土）13:00～14:30に、大阪市立大学梅田キャンパス・文化交流センターにて開催した。

登壇者は2名であり、その氏名と演題は、各々樫田美雄（編集委員会委員長）『論文投稿支援ワークショップ報告』関連4原稿解説—あるいは、『若手研究者支援学』のために—及び、木下衆（日本学術振興会）「投稿戦略から研究戦略、そして生存戦略へ—あるいは、若手研究者は何を仕事とすべきか—」であった。

樫田の報告は、前半と後半に分かれたものであり、前半は、聴衆が14:40からの関西定例研究会に参加予定の中堅クラスの研究者が中心になっているだろうことを踏まえ、「若手支援企画をどう構想するのがよいのか」というメタ的問いかけを含んだものであった。

具体的には、①若手支援企画は、ニーズに合わせて二重化するべきであること（初心者支援企画と中級者支援企画を区別して実施するべきであること）。②そのうち、後者の中級者支援企画の部分においては、『学会誌』への投稿支援がどうじに、査読者養成にもなるような形で、展開可能性が担保されることが望ましいこと。③投稿支援と査読養成を、ワンセットのものとして、ひとつの「投稿・査読文化」を形成する「文化創造行為」として行って行くべきであること。これら3点の主張がなされた。

また、榎田講演の後半では、『保健医療社会学論集』27巻2号(2017年1月刊)に掲載された「査読コメントへの対応方針10箇条」へのコンメンタール(注釈)が、配布資料をもとになされ、査読者と投稿者の両方に対する「文化創造行為」の実践例として、この「10箇条」作成活動があったことが強調された。

ついで、木下の報告は、まず、『論集』27巻2号(96頁-109頁)に掲載された『論文投稿支援ワークショップ報告』関連4論文に関して、「社会学系の全ての研究室が、修士課程進学者に必修で教えるべき内容ではないか」と高い評価を与えることで始まった。そうしたうえで、その評価の理由を前半では標準的に「研究者個人への投稿戦略・中略・は、それぞれの研究戦略と密接に連動」し、そして、「研究戦略」は「生存戦略」と繋がるのだから、このような「投稿戦略の手引き」は、研究者生活の最初に教えられるべきだ、と主張するものであった。しかし、この前半の標準的解説は、報告の後半では、大きくバージョンアップしていくことになる。すなわち、ベテラン研究者も「若手支援企画」に参加し、「査読と投稿の関係」や「知的生産」に関する思考を深めていくべきである、という主張となっていた。この後半の主張は、「10箇条」の「4. 査読者への感謝の気持ちを述べよう」への不満として、査読も投稿も、両方ともに知的生産なのであって、一方的な感謝への促しは不適当なのではないか、という主張に基づいてなされたものであったが、つまるところ、「研究者共同体とはなにか」、「研究支援のどの部分を有償化し、どの部分を無償のものとして維持していくのがよいのか」というような問いこそが、「若手支援企画」の中で考えられなければならない、という主張になっている。つまり、学会が若手支援企画を考えることは、学会が、知的生産や研究者というものをどのように考えるのか、ということと同値であり、極めて重要な知的課題である、という主張になっており、たいへん刺激的なものであった。

聴衆は総勢7名と少なかったが、期待どおり、非会員の参加者もいて、有意義な会であった。

(榎田前理事：編集担当)

9. 追悼 日野原重明先生(本学会名誉会員)

本学会の名誉会員でいらした日野原重明先生(聖路加国際病院名誉院長)が、2017年7月18日に105歳で永眠されました。

日野原先生は、1994年度より本学会会員であり、2009年度からは名誉会員になられています。本学会の創設が、1989年ですから、ほぼ学会の創設直後の時期から本学会の発展に貢献して下さったといつてよいでしょう。

私が初めて先生にお会いしたのは、社会学の立場からの電話相談研究をしていたときに、平河町の砂防会館にあった(はずの)聖ルカ・ライフサイエンス研究所に先生をおたずねしたときです。当時先生は「テレコミュニケーション・ナース・スペシャリスト」養成活動をなさっていて、ご許可を得て、養成の実際を撮影させて頂きました。「丁寧に状況を聞けば、電話相談だけでかなり診断がつくから、救急を減らすことができる」とおっしゃっていたことを覚えています。

先生の葬送・告別式は7月29日午後1時から青山葬儀所で行われました。本学会からは前例にのっとり、弔電をお送りしましたところ、先日、ご遺族の方から、御礼のお手紙を頂きました。

医療の未来を見据えて、先取的な活動をたくさんなさっていた先生の先見性を引き継いで行くことが、先生の遺志を継ぐ者のつとめだと思っております。

ここに深く哀悼の意を表し、先生の安らかな旅立ちをお祈り申し上げます。

日本保健医療社会学会

会長 榎田美雄

10. 編集後記

- 本学会は、2019年に設立30周年を迎えます。これを機に、ニューズレターのアーカイブ化を進めております。No.1～No.45をお手元にお持ちの方は、至急、学会事務局（ニューズレター奥付をご覧ください。）までご連絡ください。
- 日本保健医療社会学会ニューズレターは第92号からはpdfファイルのメールマガジン形式で配信しています。もしメールマガジンの文字が読めない場合などの受信に問題がある場合は、恐れ入りますが、日本保健医療社会学会事務局（下記）まで御連絡ください

<http://square.umin.ac.jp/medsocio/index.htm>

（西村理事：広報担当）

発行：日本保健医療社会学会

編集：広報担当（西村ユミ）

学会事務局：

東京都新宿区山吹町 358-5 アカデミーセンター

jshms-office@bunken.co.jp

TEL：03(5389)0237